

## インタビュー

## 兼松 アンプティサッカーの魅力と感動を伝えるパートナーシップ活動

兼松株式会社 人事総務部 CSR推進室長

やまぐち よしひと  
山口 嘉人

人事総務部 CSR推進室

かのう ふみえ  
加納 文枝

兼松株式会社は、2019年4月に、特定非営利活動法人日本アンプティサッカー協会（JAFA）とパートナーシップ契約を締結し、障害者スポーツの一つであるアンプティサッカーの支援を行っています。現在は事務所やグラウンドの提供など、アンプティサッカーの普及活動に貢献しています。今回は本件の発案者であるCSR推進室の加納文枝さんと、上司の山口嘉人室長に、支援に至る経緯などをお伺いしました。

## アンプティサッカーとの出会いから会社での支援へつなげた加納さん

アンプティサッカー協会への支援は以前から継続して行っている当社の東日本大震災後の陸前高田市でのボランティア活動がきっかけでした。陸前高田市では、まちづくりのテーマとして「ノーマライゼーションという言葉のいらない街づくり」を掲げており、その一環として、アンプティサッカーという障害者スポーツを通して多様性を認め合う社会モデルの実現を目指しています。

2017年秋に東京で陸前高田市を応援する会が開催された際に、アンプティサッカー協会も参加していて、日本選手権を見学に来ませんかとお誘いを受けました。

お誘いに従って川崎市で開催された日本選手権は私一人で見に行ったのですが、どん

なものだろうと見ていたら途中からスポーツの競技として面白くてはまってしまって。ちょっと見て帰ろうと思っていたのに何試合も見えてしまい、寒い日でしたが朝9時から日が暮れるまでいました。プレーする選手からエネルギーがあふれていて驚くほどの躍動感がありました。すごいな、この人たちと率直に思ったのです。クラッチと呼ばれるつえを使って全力で走って、活気のある試合の空気に圧倒されました。

試合自体も面白かったのですが、選手のご家族や小・中学生の選手もいるので親御さんも来ており、その声援や様子も印象深かったです。お子さんが活躍している場面を心から喜んでいらっしゃるのが分かり、ご家族の応援を肌で感じる事ができて感動しました。

この日本選手権の翌週がたまたま当社の陸

前高田市でのボランティア活動の日でした。移動中の一本松茶屋PAでJAF最高顧問のセルジオ越後さんとアンプティサッカー協会の方々に遭遇してびっくり。CSR推進室の山口室長と当時CSR担当だった副社長もその活動に参加していたので、その場でセルジオさんに紹介することができました。その際にセルジオさんから副社長に「兼松さん、よく知ってますよ」と言われてまたびっくり。兼松江商（現：兼松）がアディダスの日本総代理店をしていた関係で、セルジオさんにスパイクを提供していたそうです。

こうした偶然の出会いもあり会社としてアンプティサッカーを支援していこうという話が進んでいきました。グラウンドを貸してほしいと選手から要望がありましたので、調整の末2018年初めから千葉の当社グラウンドを提供することが決定しました。この決定後、JAFの武田理事長が当社にいらした際に、JAFは運営事務所がなく日頃は喫茶店などで打ち合わせをしているとご相談を受けました。そこで、当社の会議室の一つを提供し、応援していこうという話になりました。

### 社内に広がるアンプティサッカーの輪と兼松らしい社会貢献活動の実現を後押しした山口さん

支援を進めるに当たっては、単なる金銭的な支援に終わらせず社員の参加を重視しています。東日本大震災の復興支援のために2011年の夏から年に2、3回陸前高田に赴きボランティアを行っています。またそれに関連して原発事故のため外出制限がある福島の子どものために、当社の千葉のグラウンドを利用したサッカー大会を毎年開催してきました。大会を盛り上げるために、当社のサッカー部員や審判資格を持つ社員が審判



少年サッカー大会でのアンプティサッカー体験会の様子

を担当するなど社員が直接関わってきました。2019年1月の大会にはアンプティサッカーチーム「バンブルビー千葉」に来てもらい、体験会を実施しました。これまでの被災地支援と新たなアンプティサッカー支援が一つになった形です。子どもたちはすごく興味を持ってくれ大変盛り上がりました。このイベントを通して、多くの人にアンプティサッカーを知る機会をできる限りつくることが重要であると再認識しました。

9月には社員向けに体験会を企画しています。今回都内でやるのは初めてののですが、いろいろな人にアンプティサッカーを身近に感じてもらいたいため、会社から近くアクセスの良い会場を探しました。また水曜日が当社のリフレッシュデーでもあり、会社の働き方改革と絡めて実施することでより足が運びやすい環境づくりを徹底して考え、社員が参加しやすい条件を工夫して整えました。

こうした試みもあり社内でアンプティサッカーの認知度が上がってきていると感じます。当社の受付入り口にあるアンプティサッカー協会の看板を見ながら、営業担当者がお客さまにアンプティサッカーの説明をしていたことがありました。また、来客の際、事務

所になっている会議室を予約し、お客さまにアンプティサッカー協会の事務所になっていることを話している社員もいます。

今後の支援として考えられるのは商社の得意分野を活かすことです。アンプティサッカー協会では今後この国際大会を日本に誘致することを検討しています。誘致できた場合、商社としての強みを活かし、さまざまな国の方々への支援ができるのではないかと考えています。

兼松らしい支援は何かと考えたときに、アンプティサッカーはこれから伸びていく障害

者スポーツで、皆でコツコツつくっていく過程でした。一つ一つ一緒にやっていた活動に魅力を感じました。

今回の支援は人との出会いの積み重ねで今日の形になっていると感じます。陸前高田とのつながり、セルジオさんとの出会いなど、全てのタイミングが絶妙にマッチしていました。どれか一つ欠けていてもこうはなりません。この出会いを大切に、アンプティサッカーを皆で応援しながら、社員の中で社会貢献の心が育っていくことを期待しています。

(聞き手：広報・CSRグループ 野田知里) 

### アンプティサッカーとは？

アンプティサッカー (amputee soccer = 切断者サッカー) とは、下肢に障害のある選手がロフトストランドクラッチと呼ばれるつえを使って脚一本でボールを蹴り、上肢に障害のある選手が片腕でゴールを守るサッカーです。(兼松株式会社社内報より)

アンプティサッカーの詳細はこちらのQRコードからご覧下さい  
[https://youtu.be/\\_gSFxd7PCTI](https://youtu.be/_gSFxd7PCTI)



フィールドでプレーするエンヒッキ選手

### アンプティサッカー協会からのコメント

#### ■兼松株式会社のサポートでの変化について

兼松様に協会本部を置かせていただき、各組織、各部署あるいは合同による現場レベル外での定例会議が根付いたことにより、水を得た魚のようにあらゆる活動や事業を推進することができています。役員・関係者が一堂に会して進捗状況の確認や情報共有を図ることで、組織としての力が高まりつつあります。アンプティサッカーをモデルとした、共に創り上げていく障害者スポーツの先駆的な連携モデルとして、広く世の中に発信していきたいと考えております。



兼松株式会社社内のアンプティサッカー協会事務所